

インタビュー

次期学部長予定者に聞く

白鷗大学法政策研究所

先般、任期満了に伴い実施された法学部長選挙において、清水正義教授が平成30年度からの学部長に選出された。任期は2年。新学部長は今後の学部の将来像をどのように描いているのか、清水正義教授の人となりを含めて、聞いていきたい。

(聞き手・法政策研究所長 岡田順太)

(はじめに)

—— 本日はお忙しいところ、インタビューに応じて頂きありがとうございます。また、新学部長就任をお慶び申し上げます。まずは、この度の学部長選挙の結果に関して、率直な感想からお伺いしたいと思います。

清水 選挙は7月でしたが、夏休みをはさんだでしょう。それで忘れた頃に理事長が研究室に来られて、「とうとう来たか」という感想ですね。

—— どこかに呼び出されたのではないのですか。

清水 いや、ゼミ生と研究室で話をしていたら、事務局から内線があって、今から理事長



清水正義教授

が行きますからって。慌てて、ゼミ生には帰ってもらいました。

—— 法学部長というどういう役目を担っているという印象でしょうか。

清水 雑用係でしょうか(笑)。昔は「学部長」というと「白い巨塔」のイメージで雲の上の人という感じを持っていましたが、私が白鷗に来た当初から偉ぶる感じの方はおらず、河原現学部長なんかもそうですが、党派性もなく和を大事にしてまとめていく感じですね。

—— 学部長選挙で札東が飛び交うところもあるといいますが。

清水 そんな「うまみ」はないです（笑）。

—— ところで、先生が白鷗大学に赴任された経緯をお聞かせください。

清水 もともと都内の短大におりましたが、公募が出ていたので応募したら採用してもらったというのが経緯です。2001年でちょうど法学部10周年というときでした。

—— それまで、栃木県には縁もゆかりもなかったのですが、初めて小山に来られた印象はどうでしたか。

清水 宇都宮線で北に向かうほど寂しい風景になって、心配になりました（笑）。でも、実際に小山に来てみると良い所でした。

—— 当時はまだ東キャンパスがなかった。

清水 そうです。本校舎の研究室は、窓から思川が見える良いロケーションで気に入っていました。研究室も広いですし。

—— 本校舎と東キャンパスとでは、どちらがお好きですか。

清水 本校舎の方が大学らしい雰囲気がありますね。東はオフィスのようで、授業時間外はどこに学生がいるのかという感じがします。

—— 法学部に着任するという事で思ったことはありますか。

清水 法学部というとか1段上の学部という感じで。院生の頃の感覚からしても、偉い先生がいるような。

—— それは東大目線ではないですか（笑）。

清水 そうなんでしょうか（笑）。でも、良い意味で、白鷗の場合はそういうことはありませんでした。

—— 割と早くに馴染めたのですか。

清水 馴染むも何も、いきなりのクラス担任で、耳の不自由な学生がいて対応を任せられています。

—— 着任早々ですか。

清水 そうです。筆談でコミュニケーションをとって。

—— 授業には付いていけたのですか。

清水 学生のノートテイクが50人くらいいましたかね。事務局の島村さんにも協力してもらって、学生の取りまとめ役とよく連絡を取りました。ハンデはありましたが、よくできる学生でしたから、おかげで成績優秀者で卒業していきました。

—— そういうところが白鷗らしいですね。

清水 今もそうですが、学生のボランティア意識が盛んで、そういう活動にも積極的に関わってくれる学生がいるのはよいことです。

—— 白鷗の学生の印象としてどのようなものをお持ちでしょうか。

清水 前任校では授業中にもぎやかでしたが、白鷗では学生も真面目に聞いてくれて、礼儀も正しいし。それでいて、よく研究室にも来てくれますね。ただ、建物の構造は重要で、本校舎の方が平行移動で気楽に来られたかな

と。もちろん、教員の姿勢にも関わるでしょうが。

—— 最近の学生の変化を何かお感じでしょうか。

清水 はい。着任した頃の学生の方がまだモラトリアムを楽しむ安心感のようなものが残っていて、それでいてよく勉強もできた感じがあります。その後10年で、構造的不況が若い学生の感性に影響を与えているのか、とりあえずの居場所のような感じで大学に来る学生が増えているように思います。

—— 真面目に勉強はするが、主体性に欠けると。

清水 そうでしょうね。役に立つものをもらおうという受け身の姿勢が気になります。

—— 法学部の人気が盛り返しているのもそういうところでしょうか。

清水 わかりません。ただ、私のような人文系の人間からすると法学は「役に立つ」感じ

がするのは確かですが。せっかくの大学生活ですから、学生には語学や哲学、歴史といったものの重要性を腰を据えて学んで欲しい。

—— 昨今の文系軽視の風潮は。

清水 短見だと思います。

(学部長として)

—— ところで、先生はこれまで教務委員やFD委員などをされ、縁の下で学部運営を支えてこられました。現在の法学部において課題があるとすればどのような点だと思いますか。

清水 先生方はそれぞれの持ち場で一所懸命に、教育も研究もされていると思います。ただ、今後の学部をどうするのかという全体的な構想となると、一人ひとりのお考えは見えてこない。そもそも、そういう話をする場もない。

—— 教授会では不十分だと。

清水 以前はありました。10数年前にカリ



キュラム改正をしようということで、渡辺忠先生や駒村圭吾先生、近藤隆司先生、高内寿夫先生なんかが提案されて、それはそれは活発な議論がありました。

—— どんな内容のものでしたか。

清水 結局、実現しませんでした。今でいうアクティブ・ラーニング的なものをすべての授業で実現しようというような、今日、提案しても評価されるものでした。

—— むしろ10年早かった。

清水 理想が高すぎたかもしれません。スキルを身につけさせるとか、物事を自分の頭で考えさせるとか、確かに教員には相当負担です。でもそういうことを考える人はいたわけです。当時、30代・40代の先生方が中心でした。

—— 提案された方々はみんな法学部から出られてしまいましたね。

清水 実現するにせよ、しないにせよ、何かの建設的な提案がきっかけとなって、活発に議論する機会は減ってしまいました。

—— そういう機会を設けたいと。

清水 前任校にいた約10年というのは、短大の冬の時代で教員全員がいかに生き残るかを考えるので必死でした。もちろん、状況は異なりますが、白鷗に赴任して教員意識の違いに驚いたものです。

—— 事務方にお任せではだめだと。

清水 事務方はよく考えてくれていると思います。ただ、法学部のことは法学部教員がよ

く知っている訳で、建設的な議論をしてもよいと思います。

—— これまでは一教員として学部を見てきた訳ですが、法学部長として法学部をこうしたいというような将来像や展望があればお聞かせください。

清水 学生のことを今まで以上に見ていく体制を作りたい。伸びる学生層を伸ばすこと、脱落する学生層を減らすこと、そこに重点的に関心をもって支援していきたい。

—— 伸びる層を伸ばすというのは。

清水 公務員試験でもより高度なものに合格するようにするとか、法科大学院に毎年一定数進学できるようにするとか、社労士などの資格取得とか、そういうものを意識的に増やしたいと思います。

—— 学業特待のようなイニシアティブの活用やコース制の実質化も考えられますね。立命館大や千葉大など、学部内に特進コースのようなものを設置する大学の動きもあります。

清水 白鷗の法科大学院の残した財産も大いに活用すべきです。実務家教員も来て頂いていますし、白鷗出身の弁護士が一気に30名を超えた。これを学部教育の財産とすべきです。

—— 他方で脱落する層への対応もあります。

清水 学校に来なくなるとか、授業についていけないとか、そうした学生への対応を充実させる必要があります。

—— 具体的には。

清水 そうした学生には個別的なきめ細かい

対応が必要になりますが、現行の担任制度ではそれができない。すぐに代案が思いつく訳ではないですが、早期の問題把握やゼミの見直しなど考えることは多々あると思います。

—— 教員の情報共有も必要ですね。

清水 そうですね。法学部生も約1200名の大所帯ですから、全員の把握は難しいですが、やはりそういう場が必要でしょう。

—— それも教授会では不十分だと。

清水 教授会は決定に重点が置かれていて、教育内容について話し合う場がありません。すぐには浮かびませんが、教育学部の専攻の会議のような機能ごとの集まりとか、科目の分野別とか、必修科目担当、法科大学院担当といった規定にはないもので課題を集約し、全体に提案する仕組みができないものかと考えています。

—— 世代別の会議の方がやりやすいかもしれません。

清水 なるほど(笑)。かつて法学入門という科目があつて、オムニバスで違う教員が担当するのですが、結局、無責任ということで無くしてしまいました。学部全体がそうした科目のようにならないよう、教員間の連携が必要だと思っています。

—— 具体的にカリキュラム改正などをお考えでしょうか。

清水 いいえ。基本的に今の枠組みはシンプルですし、大きな支障がないからこそ必要最小限の改正で続いていると思います。昔は、選択必修というのがありましたが、それよりも学生に魅力的な科目を増やすべきでしょう。

—— そうすると現状維持でいくと。

清水 科目の新設や個々の科目の見直しは必要だと思っています。科目の多様性を実現したいのです。何しろ、昨年度から開講した市村充章先生のキャリア支援講座が約10年ぶりの新規科目設置ですから。

—— 確かに専門特講の枠での新設はありましたが、新規科目となると難しいと思います。具体的に見直したい科目はありますか。

清水 まずはゼミの見直しをしたいと思います。基礎ゼミのスタートアップとステップアップは、本来的に別の科目にしてもよいのですが、当時の教務委員会としては、とりあえず学年別ということで、基礎ゼミの枠を使いました。

—— その位置づけを改めて考えると。

清水 専門ゼミも含めて、各教員の判断で好きなように授業が組めるようにフレキシブルな仕組みができればと思います。

—— 学年で固定しないということですか。

清水 そういうのもあつてよいでしょう。専門ゼミⅠを前提科目とせずにⅡが取れるようにするとか、3年までにゼミを終えて、4年では「卒業制作」という科目を置くとか。従来のやり方も可能なように、一定の開講モデルを示しながら、制度を変えていければと思います。

—— 新設科目の構想は何かありますか。

清水 それについては、私から聞きたいのですが、法学部という科目はこれだけという感じがあるのです。そんなことはないですか。

—— まずは国家試験科目がありますので、それは外せないとしても、「これだけ」というのではないと思います。経営学部との隣接領域で、例えば企業法務というような科目はあってもよいと思います。

清水 法学部の先生方が「壁」を感じないのであれば、学則事項から履修規程事項へと変わったのですから、柔軟に新設していくべきでしょう。

—— 現実的に実務系の科目として、模擬裁判や法律事務所でのエクスターンシップ、施設見学など、従来の座学とは違う科目を置く大学も多いです。ただ、これらの科目は必然的に大人数の履修者を受け入れられない欠点もあります。

清水 ともするとエリート教育のようになってしましますが、理想論を言えば、すべての授業がゼミのようになることが好ましいと思います。それが難しいのは分かりますが、教員が学生をよく知る機会を設けるのは重要です。

—— 実務系科目を新たに設置して、ゼミに類する位置付けを与えることも一案でしょう。

(人物像に迫る)

—— ここからは、先生の学生時代について伺いたいと思います。

清水 いわゆる学園紛争は終わっていたのですが、ちょうど東京教育大は筑波への移転騒動でまだ紛争は続いていて、我々は「遅れてきた青年」なんて呼ばれていました。

—— まだ大学が完全には正常化していない時代ですね。

清水 大学だけでなく私のいた神奈川では県立高校も学園紛争があつて、半年間授業がなかったり。革マルだか中核だかの大学生が紛争の指導にくるんですよ（笑）。

—— なかなか今の学生には想像がつかないでしょうね。清水先生も石を投げたり、ゲバ棒を振り回していたんですか。

清水 もちろん権威主義に対抗する意識への共感はありましたが、そうした極端なところまでは行きませんでした。日和見だと批判されるでしょうが、その点で「常識人」だと（笑）。左翼運動もセクト化していましたし、連合赤軍の「総括」なんかは、もはや猟奇的としか評価できません。

—— 先生の大学時代は、中国の文化大革命が起きていたりした訳ですが、社会主義国を理想とするような考えはなかったのですか。

清水 当時の風潮として、文革に熱狂する人々は確かにいました。それは抽象的にものを考えることの危険性からくるものでしょう。当時でも、ソ連や東ドイツ、ポーランドなどの具体的な実情は情報として入っていましたので、理想とする国として標榜することはなかったです。

—— 学生時代に打ち込んでいたことは。

清水 青少年赤十字（JRC）という団体で活動をしていました。

—— スポーツはされていませんか。

清水 中学から高校まではバスケットボールをしていました。

—— 最近は運動はされませんか。

清水 すいません、全く(笑)。まあ、旅行は好きでよく出歩いています。

(研究者として)

—— 研究者を志されたのはいつ頃からで、そのきっかけは何でしょうか。

清水 高校生の頃から日本史や世界史が好きで、割と早くから研究者になろうと考えていたように思います。

—— 特にドイツに目が向いたのはどうしてでしょう。

清水 最初からドイツというわけではありません。ヨーロッパへの関心から始まったというところです。

—— オリент文化への関心もあった時代だと思うのですが、インドとか中国とかには関心が向かなかったのですか。

清水 当時は先進地域にこそ真実があるという意識があって(笑)、ヨーロッパに真実があり、日本はそのバリエーションに過ぎないと。憲法学も比較対象の中心はヨーロッパでしょう。

—— なるほど(笑)。それでは、ヨーロッパの中でもドイツとなったのはどうしてですか。

清水 実は私は大学に6年いたのですが、全然勉強してなくて(笑)。当時、卒業論文を書くのに、横文字が読めないとダメだということでしたが、語学で苦勞しました。ラテン語やロシア語もやってみたが挫折して、結局、ドイツ語しかないということで、ドイツ史をテーマにしたという次第です。

—— それは意外な話です。学生時代からドイツに行かれてたのかと思っていました。

清水 いやいや。初めて海外に行ったのは、30過ぎてからです。ベルリンに留学しましたが、思ったとおりの街というか、政治的で左派的で。でも大学はまさに研究者のいる場所という感じで、学問の中心だということを強く思いました。学生は研究者に交じって学問をするという存在でした。

—— ドイツの食べ物には馴染めましたか。

清水 ダメでした(笑)。ロンドンよりはましでしたが(笑)。

—— 日本人の留学生は多かったのですか。

清水 公務員はいましたが、研究者での留学はあまりいませんでした。ただ、現地の音楽学校に勉強に来ている留学生というのは多くて交流もありました。音楽学校といっても大学レベルで、ほとんどプロ並みの人が通っています。

—— ところで、ドイツ史のなかでも、ワイマール期の研究をされるようになったのはどういう理由からでしょうか。

清水 もともとナチス時代の研究に関心があって、アドルノやホルクハイマーなどフランクフルト学派の本も読んでいたのですが、むしろナチス時代に至る前段階であるワイマール期に目が向くようになったのです。

—— 史料の入手に困難はなかったのですか。

清水 当時の政治史料は第二次大戦後に英米に接収され、マイクロフィルム化されていたから、問題はありませんでした。

—— 現代とワイマール期を比較して、類似点がありますか。

清水 よく第一次大戦後のドイツと第二次大戦後の日本は同じだと言われました。両方とも「良い憲法」を手に入れたと（笑）。

—— 言い得て妙です（笑）。

清水 それはそれとして、現代のドイツはナチス時代を強く反省していますが、ワイマール期のドイツは戦争責任への反感があったり、ドイツ帝国時代への思い入れもあったりして、大戦後の意識が対照的なのです。その意味で、今の日本は第一次大戦後のドイツの状況に似ている面もあります。

—— 法学部の学生に対して、歴史を学ぶ意義について、日頃から語られていることはありますか。

清水 昔はいろいろと威勢よく言っていましたが、最近は「確実なことは何も言えない」という境地です（笑）。ただ、全ての事象は歴史的である、つまり可変性がある、複数の目線でものをみる重要性を授業では伝えているつもりです。

—— そうした目線を養うのが大学ということですね。

清水 少し話が逸れますが、シラバスは半年前に書きますよね。あれは罪作りだと個人的には思います。理系ならさておき、人文系だと可変性のある社会の動きを盛り込めなくなる危険性があります。

—— そういうことを言うから、文系は目の敵にされるのです（笑）。

（メッセージ）

—— 最後に、今後の抱負などを含めて、読者へのメッセージをお願いします。

清水 微力ながら、「学」の価値を高める学部にしていきたいと思っています。先日の法政策研究所の講演会（「政治のこれから一足尾鉍毒事件とリベラル・デモクラシー」本誌9頁以下）は、まさに大学ならではの企画だったと思います。ああいうテーマで教員同士が話し合う、そして、そこに学生が参加して、時間と場所を共有するというのは大変重要なことです。参加したきっかけは何であれ、そういう経験は後々何らかのかたちで生きていくことでしょう。これはドイツで経験した大学のイメージそのままです。もちろん、学生は「学」だけで生きている訳ではないですし、就職対策なども必要でしょうから、バランスよく人生を豊かにする選択肢を提供できるようにしたいと考えています。今後の学部運営にご理解とご協力をお願いしたいと思っています。ありがとうございました。

—— 本日はお忙しいところ、誠にありがとうございました。

（清水正義教授プロフィール）

1952年横浜市生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得満期退学。専門分野は西洋史・ドイツ現代史。主著として、『戦争責任とは何か』（かがわ出版、2008年）、『「人道に対する罪」の誕生—ニュルンベルク裁判の成立をめぐる—』（丸善プラネット、2011年）など。